

発表タイトル	養鹿の楽しさ:人と動物をつなげる副次的生業
発表者所属名	地域文化学専攻(国立民族学博物館)
発表者氏名	東城義則
発表内容	
<p>【目的】 本発表は、北海道西興部村にてエゾシカの飼育、解体、加工、販売に携わる「養鹿研究会」(以下、鹿研[しかけん]と略す)の取り組みを事例に、特定動物に副次的生業として関わる様態を考察する。具体的には、鹿研によるエゾシカの生態観察、鹿牧場の管理、エゾシカの解体処理・加工・販売を中心に活動内容を検討し、現地にて「手弁当」と表現される鹿研の取り組みを予備的に考察する。</p> <p>【問題の所在】 今日の生業研究では、経済性にとらわれない伝統・伝承を規範とした周辺の生業は、マイナー・サブシステムとして位置づけられている。本発表では、マイナー・サブシステムの議論を参照しつつ、養鹿(ようろく)をめぐる人と鹿との新たな関わりを検討する。</p> <p>【調査地概要】 調査地の北海道紋別郡西興部村は、酪農業を主要産業とする人口1140人(H24.1.31現在)の山村である。鹿研は、1990年に同村の有志によって設立された。当初は会員の協働で小さな専用の牧場を建設して、2頭の鹿を飼育することから始められ、1995年には鹿肉解体加工場を整備し鹿肉の販売を開始した。そして1996年には国、道、村の補助金で鹿牧場公園として飼育環境の整備が図られた。現在は会員6名で運営され、各会員は西興部村や近隣市町村で働きながら生計を立てている。会員は各自が都合のつく時間に鹿研の用務に関わり、年に1度、総会と一般参加の鹿肉パーティーとが開催されている。</p> <p>【分析方法】 本研究は2011年3月、6月-9月における鹿研の取り組みに対する参与観察、会員へのインタビュー、ならびに新聞記事を中心とした村の関連資料の分析に基づいている。</p> <p>【考察】 鹿研発足のきっかけには、道内で最も人口の少ない村(当時)と西興部を訪れるエゾシカ研究者との交流があった。そして、鹿牧場の建設、鹿肉の解体・加工・販売を行うなかで、鹿研は自治体や研究者(研究機関)、観光客(観光業者)、マスメディアまで関わりを広げる。この関わりのはたきには、多様な人びとと関わる「楽しみ」が介在している。つまり「楽しみ」とは、個体管理や生態観察といったシカとの関わりと、他地域の視察、マスメディアとの接触など人びととの関わりによって成り立っている。</p> <p>【結論】 それまで狩猟活動や酪農業被害を通しての関わりが中心であったエゾシカは、飼育や観察という新たな関わりによる「楽しさ」が生じる。鹿研は村への貢献を前提として、活動を広げるなか、狩猟者、観光客、道や村といった自治体、エゾシカ研究の研究機関との関わりが生まれ、会員は人びととの多様な関わりによる「楽しみ」をもたらす。これは、鹿研の活動がシカとの関わりと、人、自治体、機関といった関わりとの網の目に埋め込まれることを意味する。そして鹿研の取り組みが広く認知されてゆく経過で、鹿研は西興部村におけるエゾシカ利用を進める団体として、西興部村とエゾシカを結びつける象徴となる。最後に「楽しみ」を媒介として、特定動物を生活の場に結びつける本事例は、特定動物と関わる副次的生業が、生業としての伝統・伝承を直接の契機としない偶発的なきっかけにより生じることを喚起する。</p>	